

てしまふのである。

最近相互信用組合が発生し始めた、彼等の銀行は假令微弱なものではあつても他の銀行と競争することが出来るし、既に幾分借入利率を引下げた。最近に至つて村に信用組合及び村立又は郷立の銀行が發展し始めてゐるが、それはその顧客が農具、食糧及び家畜の糧秣を買入れるための少額信用の需要を充すことを目的とし、これらの銀行は時には農業生産物の販賣の仲介者の役目を果してゐる。これらの銀行の或るものは機械を買入れ、その職員にそれを一時的に利用させてゐる。一九一五年には信用組合は六七を算した。その借入利率は九%乃至一二%の間を動いてゐる。

邊疆の商工業界の發達上、一九一一年——一二年の貨幣恐慌は重大な消極的な役割を演じたが、その恐慌の發生はアムール沿岸地方の信用の困難な諸條件と關聯してゐる。

アムール鐵道の建設、要塞の建造、都市人口の増加は、この地方の商業を著しく昂揚せしめるに相違ないやうに見えるがしかし實際は下に述べるやうな理由により、これらの好ましい條件は商業企業の發達を授けなかつたのみでなく、反對に商工業階級の非常に多數の者の倒産と破産を結果した。

ウラヂヴ・ストツク取引所委員會の意見によれば、このことは次のやうに説明される。即ち、邊疆に於ける主要な購買者は國庫又はそれに結びついてゐる御用商人と納入請負人である。國庫及びその契約者の支拂能力は疑ふべくもないため、商館は彼等に廣汎な信用を與へ、この信用のために多大の損失を蒙つたのである。國庫は數ヶ月、時には一年間及びそれ以上にさへ支拂を延期した。かやうな條件の下では貨幣市場の維持のために銀行の援助が必要であつた。しかし丁度この時ロシヤ・アジア銀行は精力的にその顧客の債務の回収に着手し、信用を著しく縮小した。このことは最も強固な商館をさへ非常に困難な状態に陥入らしめた。邊疆に商品を供給してゐた市場は一聯の倒産を以てこの地方の住民の購買力の喪失を意味するものと解し、これらの市場もまたその信用を縮小した。

一九一一年——一二年の危機はまた、「黄色人」の労働の利用からロシヤ人労働者の労働に移行しなければならなかつたところの御用商人にも影響した。これらのロシヤ人労働者はヨーロッパ・ロシヤから招聘せねばならなかつたのである。御用商人はこれらの労働者の輸送並にその住居の建築及び給料の支拂のために金錢を使はねばならなかつた。國庫の支拂の延期はなほ一層御用商人の状態を困難ならしめた。以前支那人を使用してゐた時には彼等は若干の運轉資金を持つてゐる支那人の御用商人の信用を利用することが出来、それは急に返済を要求されなかつたし、また労働者との勘定は作業を終えた後で済ましてゐた。この内幕の信用も新たな労働者雇傭規則と共に消え失せた。

給料の不拂は作業の停止を結果し、それはひいてはまた作業不履行の違約金の支拂を結果した。銀行は御用商人に信用を與へることを拒み、御用商人の多數は崩壊した。

交 通 路

邊疆とヨーロッパ・ロシヤを連絡する鐵道及び邊疆に於ける鐵道

シベリヤ鐵道が邊疆とヨーロッパ・ロシヤとを連絡してゐる。この鐵道はチリヤビンスタから起るが、そこにはモスクヴァから來た鐵道とベトログラードから來た鐵道が集つてゐる。オムスクで更に一つのベトログラードから來た鐵道（ベルミ、エカテリンブルグ、テムメン及びオムスク）と連絡してゐる。この鐵道のイルクーツク以東はザバイカル鐵道と呼ばれてゐる。それはシベリヤ鐵道のやうにまた一つの支線に分れてゐる。その内の一つは國境を越え、その名も東支鐵道となつて滿洲を横切り日本海岸に至りウラヂヴ・ストツクに達し、商業驛エゲルシリドで終つてゐる。他の支線は分岐驛カリムスカヤから東北に向ひアムール鐵道との連絡點に到る。アムール河から少し離れてアムール州を通り、鐵道はハバロフスクの近くで再びアムール河に近づき、ロシヤ第一のツェサレウチ・アレクセイの鐵橋によつてこの河を横切り、ウストリ鐵道と

の連絡點に至る。ウスリー鐵道はニコリスク・ウスリースキイに於て東支鐵道と連絡し、それと一緒に複線となつてウラチヴ
ウストツクに達する。

個々の支線の中では、最初は廣軌で鑛山の近くで狹軌になつてゐるスーチャン鐵道と木材輸送のための一聯の小さな支線
スヴィヤギノ（スヴィキノ驛等に至る）を擧げねはならない。次の支線はアムール鐵道の驛とアムール河の波止場とを連絡し
てゐる。即ち、ルフロヴ驛とアムール河の波止場チャリダ間、ウシュミン驛とチルニヤエヴ間、ボチカレヴ驛とブラゴ
ヴシチンスク間、ソロリ驛とアムール河畔のコサツク村バシコヴォ間の鐵道がそれである。

以上の鐵道は、戰略的、經濟的及び植民的意義をもつてゐる。ウスリー鐵道に於ける貨物の發着の最も多い驛を貨物の數
量の順に擧げると、ボグラニチナヤ、エゲルシニリド、ウラチヴオストツク、ペールヴァヤ・レーチカ、カンガウズ、ハバロ
フスク、エヴゲニエフカ、スヴィヤギノ及びオケアンスカヤの順になる。アムール鐵道ではブラゴヴシチンスクの貨物の
積卸しが最も多い。

ヨーロッパ・ロシアと邊疆を連絡する海路

邊疆の港と黒海及びバルチック海のロシアの港との間の交通に従事してゐるのは、主として義勇艦隊（ドブロヴォーリスイ
・フロート）とセーヴェルヌイ會社の汽船であり、それは數個の港の碇泊期間を含めてオデッサ—ウラチヴオストツク間の
航海に約四〇—四五日を要してゐる。そのほか大戰前までは、リクメルス會社及び「ハンブルグ・アメリカン・ライン」會
社の汽船が絶えず航海を行ひ、ウラチヴオストツク及びアムール河畔のニコラエフスクと主要なヨーロッパの港、ハンブルグ、
アントワープ、リヴァプール、ロンドン及びグール間の交通に従事してゐた。これらのすべての汽船は積載貨物の都合で隨
時種々の港に寄港した。最も多く寄港した港としては、青島、上海、シンガポール、コロンボ、ポートサイド及び揚子江の
波止場—漢口を擧げることが出来る。これらの汽船による旅客の移動は航海期間の長いこと、比較的切符代が高かつた

ため僅少であつたが、その代り貨物の輸送は汽船運賃が鐵道運賃よりも割合に安かつたため、より好ましい状態にあつた。

邊疆と隣接諸國即ち日本及び支那との交通に従事してゐるものには、義勇艦隊の汽船のほかに、若干の日本の會社がある
が、その中で最も強固なものは大阪商船會社と日本郵船會社である。ウラチヴオストツクと定期航路によつて連絡されてゐ
る主要な港としては、日本の敦賀、長崎、函館、支那の芝罘、青島、上海及び朝鮮の元山を擧げることが出来る。遠洋航海
及びヨーロッパ・ロシアの港からウラチヴオストツクに寄港する汽船の中では戰前まではロシアの汽船が第一位、日本船が第
二位を占め、ノルウェー船とイギリス船がそれについてゐた。

カムチャッカの漁業は主として日本の汽船と帆船を利用してゐる。

往來する旅客の中では支那人が一番多く、朝鮮人と日本人がそれに次いでゐる。大シベリヤ線の急行列車で日本及び支那
に旅行する者には義勇艦隊の急行便の旅客船が適當である。

戰時情勢と關聯して、一九一四—一六年のウラチヴオストツクと北アメリカ及び日本の種々の港との間の交通は非常に
活潑であつた。

邊疆の海岸の近海航路 (註)

註 「近海航行」といふ言葉は特定の國の海岸に沿ふ船の航行を意味する。「近海」航路は遠洋航海に相對するものである。

近海航路の最も盛んに行はれてゐるのはウラチヴオストツク及びニコラエフスクの附近である。邊疆の海岸に沿ふ廣い區
間の汽船の航行は發達してゐる。ウラチヴオストツクと總べての灣及び邊疆の海岸の移住地との交通に従事してゐるのは義
勇艦隊汽船である。この汽船會社はまた、カムチャッカ、樺太、アナズイリ地方及びカルイム河の河口に到る航路を開いて
ゐる。汽船の主な寄港地は次の如くである。即ち、アムール灣のストラヴァンカとボシエト・アスコリド島、プチ・チン島、
灣ではナホドカ、ブレオブラジューニエ、聖オリガ、聖ウラヂミールの諸灣、チュチヘ、インベラートルスカヤ、デ・カストリ、

樺太のアレクサンドロフスキイ哨所とスウェ、ニコラエフスク及びベトロバヴロフスクがそれである。

上記の碇泊港の多くは不満足なものであり、特に樺太のアレクサンドロフスクがさうであり、オコーツク海岸にもよい碇泊港はない。汽船の寄港地としてはアヤン、オコーツク、ヤムスク、ギジガ、チギリ河とポリシャヤ河の河口があるが、風から蔽遮されてゐない。その上ギジガでは汽船は海岸からはるか沖に碇泊せねばならず、極めて天候が不定であり霧が多く商品の荷卸しに永くかゝる。これらの不便は多少の程度の差こそあれ商品の荷卸しをする他の場所にもある。河の流れが波浪にぶつかつた結果河口や河口の入江に出来てゐる砂洲は非常に危険である。ほんの少しの風の時でもこゝでは危険な碎け波が立つのである。河口には漁場があるので、これらの場所を訪れることは非常に多いが、それと同時に砂洲があるためそれは非常に危険である。汽船から商品を積込んだ舟や舢が砂洲にぶつかつて沈没することも稀ではない。カムチャッカの東海岸にもまたよい碇泊港は少いが、ベトロバヴロフスク港はその例外をなすものである。邊疆の海岸一帯に互つて、霧が船舶の航行を著しく困難にしてゐる。オコーツク海及びベーリング海の海岸に石炭積場のないことも航行を不便ならしめてゐるが、そのため汽船は往復兩航路に必要な石炭を貯へておかねばならない。

現存の航路の数はなほ非常に不十分である。多くの海岸の村の住民は商業中心地と交通することが出来ない。天候の都合で屢々汽船はあれやこれやの場所に寄港することが出来ず、従つて商品はどこか近くの碇泊所で陸揚げするか又は出發點に送り返される。往々漁業製品及び労働者が漁場から汽船に乗ることの出来ないことがある。彼等は全く成行きに任せねばならなかつたこともあつた。汽船の發着を住民の要求に一致させることは困難なことであり、漁業家及び海岸の住民が絶えず苦情を言つてゐることから判断すると、それは決して生活上の需要を充してゐないのである。

戰爭中は沿岸で従業してゐる船舶の数は幾らか減退したが、そのことは更に邊疆のこの地帯の住民の交通を困難にした。當地の海岸には船舶が港に入るのを容易にする燈臺と照明燈は餘り設置されてゐない。尤大な延長を有する海岸線に、全

部で僅か一三の燈臺と一〇の海岸燈が設けられてゐるのみである。従つて眼につき難い海中の石や岩石のある非常に多くの危険な場所が燈臺によつて警戒されてゐないため、船舶は屢々それによつて破損するのである。最も重要な燈臺の中ではアスコリド燈臺を挙げることが出来る。ウラチヴォストツクに進む汽船は、この島の燈臺に向つて進路をとり、この島に近づくとスクリブレフ島の方に進路を變へるが、このスクリブレフ島の燈臺は夜は光により、霧の時はサイレンによつて東洋ボスホル海峡への入口の場所を指摘する。ボヴォロトヌイ岬の燈臺も重要であり、間宮海峡に入る船舶はこの燈臺によつて進路を決定する。アムール河口のニコラエフスク燈臺及びカムチャッカのベトロバヴロフスク燈臺も重要である。最近アムール河口の入江の船舶航行は、多數の鐵の浮標と標材が設置されたので容易になつた。

主 要 な 港

ウラチヴォストツク港

十分に深く四方を山に圍まれて風を蔽遮してゐる金角灣の自然的條件は、この灣の海岸に大きな港を建設するに非常に適してゐる。最近十年間に於けるウラチヴォストツク港の貨物移動量は非常に急速に増大し、戰時中はこの港は黒海及びバルチック海の港の外國貨物の輸入減退を補ふといふ重大な國家的任務を果す必要に當面し、貨物移動量は非常に大きな數量に達した。

今世紀に於ける北滿洲の農業經濟の發展と關聯して東支鐵道によるエゲルシュリドへの滿洲の穀類の輸出が著しく増大したが、それは更にこれらの商品を日本及びヨーロッパに輸送するためであつた。邊疆を通過する他の商品には、ヨーロッパ・ロシ



極めて不便なドウエの汽船碇泊所、岸にギリヤークがゐる。

ヤ向けの茶、満洲向けの鹽、地方市場向けの下に擧げる種々の商品がある。

一九一〇年乃至一九一五年の間に於けるウラチヂヴオストック港の貨物取扱數

(單位百萬ブード) (? 原文ループル)

(統計に計上されない特別の官有貨物を含まず)

年	輸 入		輸 出		合 計
	入	出	入	出	
一九〇八年	一八・〇	六・八	二二・三	一八・六	二四・八
一九〇九年	二二・〇	一八・六	三三・〇	二二・五	四一・六
一九一〇年	三〇・一	二二・五	三三・〇	三五・〇	五三・六
一九一一年	三五・九	三五・〇	四九・八	三七・三	七〇・九
一九一二年	四九・八	二七・三	五三・〇	三一・三	七七・一
一九一三年	五三・〇	三一・三	五三・〇	二九・二	八三・三
一九一四年	五一・六	二九・二	五一・六	三一・四	八〇・八
一九一五年	八一・四	三一・四	八一・四	三一・四	一一六・〇

戦前の數年、即ち一九一〇年から一九一三年までの間に輸入の増大が起り、これは一九一一年から始つてその後數年間著しく輸出を超過した。かようにウラチヂヴオストックは輸出港といふよりも、著しい程度に於て輸入港である。一九一四年には明らかに商業界の一般的世界的沈滞と關聯して輸入は幾分減退したが、しかしその翌年の一九一五年にはそれは八、一四〇萬ブードといふ非常に大きな數に上つた。

この港から外國へは、主として邊疆を通過する商品、即ち滿洲の大豆及びその他の穀類が輸出された(一九一四年には九四%、一九一五年には九三%)。この地方で生産される商品は僅かしか輸出されなかつた(一九一四年には六%、一九一五年には七%)。

ウラチヂヴオストック港からの外國への貨物の輸出

國 別

主要商品

一九一四年

一九一五年

日本、支那及びイギリス

地方産の商品

一%

三%

日 本

木材(ベニヤ板、丸材)

五%

四%

日本及びイギリス

滿洲産の通過貿易商品

八七%

九〇%

イギリス

豆類及び豆糟

二%

—

イギリス

建築用木材

五%

三%

イギリス

麻の種子及び穀類

—

—

貨物取引總量のうちロシアの港との取引と外國の港との取引の割合は次の如くである。

年	次	一九一二年	一九一三年	一九一四年	一九一五年
貨物總取引總量(百萬ブード)		七七・一	八三・三	八〇・八	一一六・〇
邊疆の港との取引		四五%	三三%	三〇%	一九%
ヨーロッパ・ロシアの港との取引		—	一一%	八%	—
外國の港との取引		五五%	五五%	六二%	八一%

ヨーロッパ・ロシアから鐵道材料、鐵製品、セメント、砂糖、毛織物、ウツカ、酒精、酒、その他の商品を購入した。邊疆の港、或は邊疆の海岸の諸處から、砂、薪、水産物、石炭、種子、野菜、その他を輸入し、上記の場所へウラチヂヴオストックから、麥粉、建設材料、鹽、その他を輸出した。

最近に於けるウラチヂヴオストック港の外國商品輸入の積出港國別分布は次の如くである。

第三部 住民の經濟活動

しかし上記の積極的な面と並んでなほ若干の好ましくない事情のあることを看過してはならない。港の發展は多數の政治的、經濟的、技術的及び生活上の條件に依存して居り、これらの條件はウラチヴォストツクの今後の發展に種々の影響を及ぼすのである。ウラチヴォストツク港の發展は有力な競争に逢着してゐるし、將來も逢着するであらう。その競争者は大連にある日本の港と朝鮮の若干の港である。最も危険なのは大鐵道網を有する大連であり、それは完全にウラチヴォストツクの勢力範囲であるべき管のハルビン地方を含む中部滿洲をその勢力下に置いてゐる。若干の點では大連の條件はウラチヴォストツク港の條件より悪いのであるが、防波堤によつて港を蔽遮し、港によい設備を設けた。碎氷船が冬の間ウラチヴォストツク港と海との交通を維持するが、しかしこの港は結氷すること、南滿洲の鐵道網及びその鐵道政策は中部及び北部滿洲から大連への商品の移動を助成してゐること、ロシアの港の税關の形式はより複雑であり、手間がかかり、且つ陸揚費用は高くより長くかかることに注意するならば、大連港はウラチヴォストツクにとつて重大な競争者であると言はねばならない。ウラチヴォストツク港の貨物取扱數量に消極的影響を及ぼすものとして南滿洲に於ける製油工場の數の増大を挙げねばならない。ヨーロッパに豆の穀粒を輸出するよりもそれから搾つた油と油槽を輸出する方が有利であるため、日本人の製油工場はより高い値段で豆を買つて大連に送ることが出来、そこで油を搾り、油及び油槽として更に輸出してゐる。ウラチヴォストツクにはこの工業は發達して居らず、こゝにはたゞ穀粒のまゝ外國に輸出される豆が送られるのみである。

東支鐵道の調査によれば、その鐵道附近の滿洲の地方から大連を通つて輸出される貨物の量は年々増加を續けてゐるが、ウラチヴォストツクに送られる貨物の量は増加してゐない。このことは貨物の吸收のため日本の鐵道のとつてゐる一聯の方策と大連港を通過する輸送が前述の便益によるものである。

既に港の設備が擴張され、即ち、繫留棧橋は延長され、多數の倉庫が建築され、貨物置場の面積が擴張されたため、港灣作業の技術的方面は著しく改善され、この點ではウラチヴォストツクはやがてその競争者に劣らなくなるであらうと考へねばならない。既に完成した鐵道線路の延長と船側への近接は著しく取扱貨物の積却し作業を容易にしてゐる。一九一六年には灣の南岸のペールヴァ・レーチカ驛を廻り、チルキン岬に到る鐵道の建設に着手し、かやうにして軍港の管轄に屬する部分以外の金角灣の全海岸は商港の目的のために利用されるであらう。金角灣は港の設備の完成後は遠洋航海の船舶の使用に供されるであらうし、アムール灣の港は沿海航路の小さな船舶の使用に供せられる豫定で、この目的のためそこに防波堤が作られた。海岸から少し離れたところに碇泊してゐる汽船に商品を輸送する荷船の荷揚のために、アムール灣の他の場所にも同様な港が建設された。

邊疆に於ける河川交通

交通路としてのアムール河及びその系統の河川

この書物の初めに邊疆の船舶航行の出来る河を擧げた。早瀬の多いこと、流れの速いこと、洪水の際の著しい水位の變化——洪水の時河は洗ひ去られた樹木や木の株を流す——は、多數の河を汽船航行の目的に利用する際、主要な障害になつてゐる。特にアムール河については、その河は全長に互つて船舶航行が可能であるが、その上流河區には淺瀬が多く、河の狭い彎曲した水路と曲角で船を操ることが困難であるため、船舶の移動には若干の困難のあることに注意せねばならない。水流が強い船が河を下る時と上る時の時間には著しい相違がある。航行期間は約六ヶ月である。屢々見られる朝の霧、山間の夜の闇及びアムール河を大きな湖水に變へ河岸を水浸しにしパイロットが進路の方向を定めるのを困難にする夏の洪水は、船舶の航路としての河の質を低下させてゐる。

貨物用、旅客用及び郵便用汽船の定期航路はシルカ河のステレンスクに始り、アムール河全體とゼーヤ河に互つてゐる。アムール河系の他の最も重要な河川、即ちブレレーヤ、トングスカ、アムゲニ、セレムチャ、ウスーリには汽船の定期的航行

はなく、住民は商人の傭船した鑛山に荷物を運ぶ汽船の偶然的航行を利用するか、移民省の汽船を利用せねばならない。アムール河には二〇〇に達する汽船が航行して居り、それは多数の船主に所屬してゐたが、一九一五年以來殆んどすべての船主は二つの大きな会社に結合した。その会社の一つはその所有汽船を淡褐色に塗つてゐるが、「アムール汽船通商會社」と呼ばれ、二五隻の汽船を所有する。他の會社は「アムール・フロート」と言ひ、一〇〇隻に達する汽船を有し、白色に塗つてゐる。前の社會の汽船は郵便物を輸送し、その航路は定期的とされてゐるが、「アムール・フロート」の汽船に比べると長く時間がかかる。アムール河の汽船には種々の型がある。(一) 横に車輪のついた大きな汽船(ヴルガ型)。この型の或ものは小舟や荷船を曳船するに適し、他のものは専ら旅客用に用ひ、旅行用の多数の施設を設けてゐる。(二) 後に車輪のある汽船(アメリカ型)もまた荷船の洩船に適する。(三) 専ら洩船用に用ひる汽船。最も重要な波止場には次の如きものがある。即ち、スレテンスク、ヂャリンド、ブラゴヴシチンスク、アレクセーエフスク、ゼーヤ・プリスタニ、ハバロフスク及びニコラエフスクがそれである。アムール鐵道の建設前はスレテンスク波止場は特に重要な意義をもつてゐた、といふのはこゝで汽車から船へ、又はその反對の商品の積換へが行はれたからである。アムール鐵道の建設と共に、次のやうな場所から汽車から汽船へまたは反對に商品を積換へることが可能になつた。即ちヂャリンド(ヂャリンド・ボチカレヴォ線の驛) フラゴヴシチンスク(フラゴヴシチンスク・ボチカレヴォ線の驛)、アレクセーエフスク及びハバロフスクがそれである。アムール鐵道の規則的運轉の開始と共に、スレテンスクは商品の積換地點としてのこの意義の大部分を失ふものと考へねばならない。下に降る貨物——その中には水産物も含まれてゐる——を、シベリヤ及び更に何處か西に輸送するには自然ニコラエフスクの近くの上記の波止場の一つで積換へを行ふであらう。スレテンスクの最もありさうな、危険な競争者はブラゴヴシチンスク及び恐らくはハバロフスクであると考へねばならない。

交通路としての當地の河川は上述の缺點をもつてゐるにも拘らず、河川はこの地方の住民の生活に於て非常に重要な役割

を演じてゐる。非常に多くの移住地は夏になると河川以外の交通路をもつてゐない。農民は舟で貨物を輸送し、隣りの村と交通する。政府の役人もかやうな僻地を訪れる場合にはやはり舟に乗つて移動せねばならない。また舟に積んで多数の鑛山に荷物を輸送しなければならぬ。植民は河に沿ふて行はれ、また移民管理局の開いた村落間の道路は河に連つてゐる。冬になると氷結した河は屢々よい橋の道路になる。

陸上交通路

昔の道路

邊疆に於ける陸上交通路の建設の第一歩は、渤海王朝及び金國の支配した遠い時代に遡る。その當時からの砂利道及び舗装しない道の跡、排水溝、峠に通ずる坂道及び行き止り道が残つてゐる。その後この地方は荒廢し、嘗て相當稠密であつたこの地方の昔の住民が往來した車道も同時に荒れ果てゝしまつた。

小路

瓦壞を免れた異民族は小路で満足した。前世紀に入つて支那人の出現と共に小路の数は増加し始めた。シホタ・アリン山脈の大きな谷間には殆どすべてにかやうな小路があつたが、それは獵人又は農民の小屋に通じてゐた。ウストリ森林帯の密林の黒貂を狩り、人參を採集し、異民族と取引をするため、これらの小路を通つて支那から支那人(滿子)がやつて來た。またこの地方の最初の移住者であるコザックもこれらの小路を進まねばならなかつた。移住民もそれを利用することが稀でない。車に乗つて小路を通つては絶対に出來ないし、駄馬を曳いて通つても常に必ずしも可能ではなく、また決して何時でもそれを通つて旅行することが出來はしない。洪水の時岸から溢れた小川は數日間又は一週間も旅行者を他の世界から隔絶する。小路は屢々非常に僻陬の場所を通つてゐるので、旅行者が糧食の問題を熟考しなければならないのは尤もなことで

ある。森林帯に馴れてゐる異民族のみが、道に迷つた旅行者を道案内することが出来るのはいふまでもない。絶えず森林帯を往來してゐる支那人でさへ、多くの僻陬の場所では外に出ることが出来ない。往々小路は河に切斷され、それから先は舟でなければ移動することが出来ない。適當な木を探し、獨木舟を彫り、急流を下つて河の對岸の道の續いてゐる所に行かねばならない。シホタ・アリン山脈を越える時も非常に困難な場所である。現在それは二〇以上知られてゐる。そのうちウスーリ地方の南部のより、人口の多い所にあるものはより、主要な主義をもつてゐるが、その他のものは獵人の異民族が利用するのみである。道路がないため僻陬の移住地の鑛山に商品を輸送する場合には、荷物を擔ぐ交通が本質的な役割を演じてゐる。

舗装しない道路

移民の先驅者はその土地に落着く前に通常道を作り、その上を通り車に乗つて森林帯の奥に進むことが出来たのである。時には一日三露里の速さで、かやうな移動に數週間を費した。荷車と家を後にのこして男は前に進み道をつけ、邪魔になる木を切り、かやうにして開いた道を通つて、屢々車を泥濘から曳き出し、荷物を積換へ、馬を換へ、苦心慘憺して前進した。前世紀には農村及び鑛山の住民は自分の資金により自分の力を用ひて開いた道を利用した。

今世紀の初頭に至つて初めて移住者の必要に應じ國庫の資金による道路の建設が始つた。道床に適しない粘土質の土壤、水浸になつた河の谷間——主にかやうな處に道をつけねばならない——、峠を緩やかにする高價な工事、高價な橋梁、絶えず道が洗ひ流されること、これらのことは道路の建設を非常に高價なものにする。移民省は割當てられた信用によつては限られた道路しか建設することが出来ないが、このことは農村の住民の物質的狀態に極めて破滅的な作用を及ぼし、農業生産物の積出を困難にし、植民の發展を妨げる。多くの場所では時には僅かばかりの距離の貨物の輸送が、商品の價値を著しく越えてゐる。驛遞街道に沿つてゐるやうな地點の間にある比較的人口の多い場所でも、決して常に必ずしも交通が可能

なわけではない、といふのは洪水の時には橋はないし渡舟は流されて屢々通行が不可能になるからである。道路に對する需要が本質的でありこの地方の國土の廣大であることに注意するならば、村落間の道路建設の點で最近十年間になされたことは極めて僅少である。

驛遞輸送は次のやうな街道で行はれてゐる。即ち、ボシエト、ニコリスク・ウスーリスキイと興凱湖畔のカイメニ・ルイバロフ間、ニコリスクとアマチノ間、シコトヴと聖オリガ哨所間がそれであり、冬はアムール河口に沿ひ、またハバロフスク——ブラゴヴニチンスク驛遞街道、アムール河の波止場とアムール鐵道の驛の間驛遞輸送が行はれてゐる。

最近就中二つの大きな舗装しない道路が建設されてゐる。一つはチャリグ地方からヤクーツク州に通じて居り、他は所謂ニコラエフスク幹線道路であり、セレムチ河の上流からブレイヤ山脈を越えてアムグニ河に至り更にニコラエフスクに達する。

樺太島及びカムチャツカ州に於ける交通路

樺太では徒刑のあつた當時一聯の舗装しない道路の建設が企てられたが、それも現在は荒廢してゐる。島の東部の交通は極めて困難であり、たゞ荷物を擔ぐ輸送のみが可能である。

カムチャツカのアナズイリ地方とオコーツク海岸には車の交通は全然なく、住民は極めて貧弱なバト(Bar) (木で彫つた舟の一種)で移動する。

アムール河の下流河區から北では冬の移動は普通犬や鹿に曳かせた橇に乗つて行つてゐる。かやうにして荷物を輸送し、商人は商品と毛皮を携へて旅行する。政府の役人はその管轄地區を犬に曳かけて巡廻する。

郵便及び電信

電 信

邊疆の遠隔の地はつと最近に至つて有線及び無線電信によつて他の地方と連結された。現在ニコラエフスク、ペトロバヴロフスク、ギジガ、ノヴォ・マリンスキイ哨所、オコーツクに無線電信局があり、オコーツクはヤクーツクと電信線によつてつながれてゐる。なほアムグニ河畔のケルビ、ハバロフスク及びウラヂヴオストツクにも無線電信局がある。

樺太は海底電信により大陸と連絡され、アレクサンドロフスクには無線電信局もある。電信線はアムール河、鐵道に平行し、驛邊街道に沿ふて進んでゐる。しかし國土が廣大であるため需要は充分満されて居らず、鑛山及び村落の住民は電信を利用することが出来ないのみでなく、手紙でさへ官營荷物輸送隊(Органи)に託して送らねばならない。若干の鑛山は私費で設置した電信によつて連絡されてゐる。

郵 便

鐵道の近くの場所では郵便機關は正常に活動してゐるが、邊疆のその他の場所ではさうでない。ニコラエフスクでは一年中規則正しく郵便を受取ることは出来ないで、春と秋には、流水後汽船の航行が開始されるまでの間と秋最後のアムール河が凍結し橋の道が開けるまでの間郵便の輸送は停止する。カムチャッカでは夏は汽船が郵便を輸送するが、冬には郵便はヤクーツク及びオコーツクを通つて送られる。樺太にはニコラエフスクから次に曳かせて郵便を送る。

農村住民及び異民族の福祉

農民の福祉

住民の一部即ち古老の福祉の程度が高度であることは疑ひを容れない。移民管理局による農村住民の物質的狀態の調査によれば、古老の農業財産はヨーロッパ・ロシアの農民のそれにはるかに優つてゐる。同じことはまたその分配地、非常に多

額の家計、機械の數、牛馬の數、貯蓄銀行の預金高についても言はねばならない。古老の家族の人員の多いこと、比較的死亡率が少くて出生率の高いこともこのことを立證してゐる。

農村住民の他の群——新住者は決してこのやうに生活が保證されてゐない。

これらの二つの群の物質的保證の程度の著しい差異は次のやうな原因によつて説明される。即ち、(一)分配地の大きさが一樣でないこと、(二)古老はよりよい地所を選ぶことが出来たが新住者はより悪い土地で満足せねばならない、(三)新住者の新らしい村は邊疆のより僻陬の場所にあり屢々満足な道もなく、その勞働の生産物を市場に搬出することが出来ずより不利な價格でそれを販賣しなければならぬ。耕地の廣さ、家計、家畜の數、家畜の罹病率、新住者の出生率及び死亡率もより好ましくない指數を示してゐる。多くの場合彼等は他に仕事を求めねばならず、また非常に屢々新らしい場所の生活條件に不満を感じ又は窮乏して郷里に歸り、或はシベリヤの他の州に移轉する。新住者は就中共有地の再分配と各戸毎へのその配分を彼等の狀態の改善上の手段と考へてゐるが、勿論それは古老にとつては不利であり、古老は通常それに反對してゐる。たゞ村會に於て新移民が投票の三分の二を占める場合にのみ、村會は再分配の決定を行ひ、すべての土地は村落共同團體の會員の間に分配される。

福祉の程度はまたこの地方に於ける滞在の期間に依存してゐる(圖表を見よ)。移住者は邊疆の生活の最初の時期が特に困難な状態にある。調査によれば、四年間(一九〇六——一九一〇年)にアムール州に來往した家族のうち、一九一一年に馬を持つてゐなかつたものが地方によつて異なるが三分の一乃至六分の一、來住者の三分の二は牛を持つことが出来ず、彼等の半分は播種に着手せず、全家族十分の一は未だ住宅を持つてゐなかつた。沿海州では一九〇七年に定住した者の數のうち二年後になほ五分の一は馬を持つて居らず、十分の一は住所を持つてゐなかつた。

移民管理局は移住者の狀態の改善と邊疆に於ける彼等の速かな定住の助成に當つてゐる。通常國庫は農具の備へ附け、住

宅の建築及び第一回目の收穫までの家族の給養のために一時的貸附を行つて助成してゐる。平均貸附額は約一五〇——二〇〇ルーブルの間を動いてゐるが、移住家族の緊要な需要に比べると著しく不足である、といふのは住宅の建築及び馬や農具の買入れのためには著しく多額の金銭が必要であるからである。この助成の形態のほかに次第に多額の金銭が所謂「住民の公益的必要」即ち新住者のための新たな土地の準備、土地の排水のための豫備的作業、道路の建設、洪水の防備、農業指導組織、家内工業の發達の助成、等々のために支出されてゐる。森林帯開拓の上記の方策はアレクサンドロフスクからほど遠からぬウリミナ驛方面で特に廣汎に實施されて居り、また洪水を防ぐためにイマン、ホル、その他の河の谷間で大々的水力工事が行はれてゐることを指摘せねばならない。

古老の福祉の増進に貢献した間接的諸方策の中では次の如きものを擧げることが出来る。即ち、(一)一九〇九年までの邊疆の住民の兵役義務の免除、(二)經理部による地方農産物の奨励的買上、往々當時滿洲から輸入された同じ生産物の價格よりも高い價格による買上、(三)ヨーロッパ・ロシアの農民の支拂額に比べてより、少額の貢納の賦課、(四)非常に有利な、しかも廣汎に行はれてゐた支那人及び朝鮮人への土地の賃貸、(五)安價な「黄色人」の勞働を使用して農業勞働を行ふことの可能性がそれである。

註 定住後最初の十年間移住者は貢納の支拂の割引を受け、十一年目に至つて初めて地方廳の賦課する課税の金額を支拂ひ始めるのである。統計的調査によると、農民の家族の福祉は非常に著しい程度に於てまた家族の人員に依存してゐる。家族の人員の多い農民は比較的早く邊疆に落着き、急速にその經營を組織するが、これに反し家族の人員の少い農家は落着くことがはるかに困難であり、勞働力の不足に悩んでゐる、といふのは彼等は充分廣い面積の處女地を開墾することが出来ず、最初の數年の收穫を確保することが出来ないからである。

次に掲げる一九一四年の邊疆の國立貯金局の業務に關する資料は住民の物質的福祉の比較を示してゐる。

沿 海 州	預 金 者 數 (住民千人に付き)	平 均 預 金 額	住 民 一 人 當 り 預 金 額
ア ム ル 州	一六九	二二一ルーブル	三七・五四 ^{ルーブル} コペク
ヨ ー ロ ッ パ ・ ロ シ ャ	一一五	二二五 ”	三一・九三
	六一	一九七 ”	一一・九一

上記の州はこの點ではたゞベトログラード縣及びモスクヴァ縣の二縣に劣るのみである。

異民族の福祉

新たな生活條件への異民族の適應の過程は非常な困難をもたらしてゐる。高い文化の「幸福」の移入は、非常に屢々異民族の生活のすべての習慣を破滅し、彼等の福祉を低下し、且彼等を零落させることも稀でなく、また多くの場合彼等の死滅を結果してゐる。

多くの場合より、文明化した民族からのあれやこれやの文化の移入は疑ひもなく多大の害毒を及ぼしてゐる。このことは例へば建築の型の變化について言ふことが出来る。即ち、異民族は天幕に慣れて居り、雪下三〇度の日にもその中の温度はそれより三——四度高いのみであるが、それでも彼等は全く健康なのである。彼等はかやうな環境の中で生れ、その中で生活してゐる。若し暖い煖爐のあるロシア式の小屋に異民族を移住させるならば、彼等の有機體にとつて不慣れた暑い、しかも温度の烈しい條件が作り出される。この條件は自然リウマチス、肺炎、その他の病氣をひき起すに相違ない。

異民族に對する酒精及び傳染病の破滅的影響については既に述べた。宗教の變化、祖先から傳つてゐる宗教的儀式的禁止も彼等の健康に悪い作用を及ぼしてゐる。古い信仰は今なほ有力であり、異民族はたゞ公式には正教徒と見做されてゐるが實際は異教徒であり、時たまやつて來て彼等に洗禮を施し、あとは随分長い間來ないで彼等の勝手にさせておく牧師よりも

半合法的なシャーマン教の僧侶を信用してゐる。

彼等の生活の新しい條件は時には彼等を定住生活に移らせてはゐるが、田や菜園ではなくて森林帯が従前通り異民族にとつてはなつかしい住家である。森林帯の中で彼等は鋭い聴覚と視覚を働かせ、こゝで彼等はあらゆる草を採り、あらゆる野獸を捕へる。森林帯の外では異民族の多数は生活することが出来ない。他面未だ斧鉞を入れぬ處女林は文明人にとつては障碍物であり、農民の生活を可能にするためにはそれを破壊せねばならない。かくて古い文化の代表者と新しい文化の代表者異民族とロシアの移住者との間の不避的對立が起るのである。この衝突に於ては勿論より、無力な前者が敗北する。異民族は盛んに死滅してゐるが、この死滅は彼等の人種の生活力の消耗の結果起つてゐるのでないことをこの際注意する必要がある。といふのは小兒の出産率は民族の生存力の重要な指標であるが、當地の異民族のそれは低くないからである。しかも多くの場合異民族の人口の減退が起つてゐるとすれば、このことは困難な經濟状態、古い慣習の急速な破壊と、傳染病の蔓延によるものと言はねばならない。

異民族の生活に於ては大市が重要な役割を演じて居り、その意義は單なる經濟的要因の範圍を越えてゐる。大市に政府の役人は租税を徴収に來るし、傳道師は一年中の職務を果しにこゝにやつて來る。彼等は最近一年間に生れた子に洗禮を施し、死人を葬ひ、結婚をさせ、聖餐を與へる等々。またこの地方の災疫——酒賣りと商人——債權者がこゝへと急ぐ。

近年汽船航路の擴大と共に多数の大市の意義は失はれ始めた、といふのは船着場に新たな市場が發生し、異民族は買物にこゝへやつて來るからである。この新しい事情は幾分異民族の状態を改善してゐる。何故なら彼等は値段をよく知ることが出来るので狡猾な毛皮仲買人との取引を免れることが出来る。これらの仲買人は異民族の假小屋に行つて狩獵の獲物の眞實の價格を知らぬ異民族と有利を取引を行ふために、僻陬の森林帯に入り込むのである。

住民の經濟活動と自然的條件との關係

沿海州及びアムール州の住民の經濟活動の主要な部門は農業であると言はねばならない。移住者の多数は郷里に於て土地の耕作に従事して居り、同じ仕事を続ける目的でこゝへやつて來たのである。

しかし邊疆の自然資源に注意する時、將來この地方に農業住民のみを植民することは自然的條件に合致せず、やがて地所の不足といふ障害にぶつかるに相違ないと言はねばならない。よい土地は既に占有され、悪い土地への移住は非常に多額の豫備的支出を必要ならしめるので、邊疆の農業住民の植民は減退し、シベリヤの他の地方への移住が増大するに相違ないと考へざるを得ない。アムール遠征隊の著作の一人の著者は、最善の場合、即ち未だ耕作されてゐないコザック及び古老の分配地の土地を利用し、排水、多数の樹木の除去、洪水の防備、道路の建設等のために多額の固定資本を支出する場合には、邊疆にはなほ一〇〇萬人に達する農業住民の移住を行ふことが出来ると考へてゐる。

勿論近い將來について言つてゐるのであるといふのはより、遠い將來について語ることは不適當であるからである。人間の自然征服のため



新住民が食物を煮る甕を作つてゐるところ

の技術的手段の進歩の程度を考慮に入れることは困難である。時と共に現在植物の栽培に全然適さないやうな土地が植物栽培の目的に利用されるやうになるであらうといふことはあり得ることである。

邊疆の人口がかやうに増加しても、その廣大な國土に注意するならば決して人口が稠密であると言ふことは出来ない。今後の人々の増加は農業のみでなく、漁業、木材業、鑛山業その他のやうな、經濟活動の他の部門の發達に依存するに相違ない。相當の勞働者と資本をこの地方に誘致することは當面の緊急の課題である。

カムチャッカ、アナズイリ地方及びオコーツク海岸の住民の福祉は魚の襲來と狩獵の成績に依存してゐる。これらの地方には農業住民は全然ゐないため、その植民の收容量は非常に限られてゐる。また樺太の農業にも期待はかけられないため、人口の増加はたゞこの地方の鑛山業が發達した場合にのみ可能である。

第四部 教育、宗教、社會道德、保健

國民教育

邊疆の初等國民教育はシベリヤの他の諸州よりも發達して居り、ヨーロッパ・ロシアの若干の縣にも劣らない。初等教育は次のやうな機關の管轄に屬してゐる。即ち、文部省、コザック軍司令部、教會監督所、市役所がそれである。邊疆には地方自治體の自治が行はれてゐないため、地方自治體の學校もまたない。

一九一一年に我國の學校の教師は住民一、〇〇〇人につき、アムール州五九人、沿海州四〇人、ヨーロッパ・ロシア五四人シベリヤ三七人であつた。アムール州と沿海州との二つの中では學校組織はアムール州、特にブラゴウシチンスクが優位を占めてゐる。ブラゴウシチンスクはまた中等教育機關の數でも第一位を占め、ウラヂヴェストツクの六、ハバロフスクの五、ニコリスク・ウスリースキイの四に對してこゝには七つの中教育機關がある。高等教育機關は邊疆全體にたゞ一つあるのみであり、即ちウラヂヴェストツクの東洋専門學校がそれである。

宗教

宗教の信仰の點から見ると、邊疆の住民は一八九七年には次のやうに分類された。

アムール州	正教徒 (註一)	舊教徒	新教徒	その他の 基督教徒	マホメット 教徒	ユダヤ 教徒	その他の非 基督教徒
沿海州及び樺太	八八・〇五 六二・二四	〇・三六 二・九〇	〇・一七 〇・〇一	〇・四三 〇・〇八	〇・五五 一・二四	〇・三三 〇・六八	一〇・一一 三三・九〇(註二)

註一 この中には正教の信徒と非改革派の信徒を含む。

註二 この中の佛教徒及び喇嘛教徒は七%。

註三 この中の佛教徒及び喇嘛教徒は二二・一七%。

最後の数字は佛教の信者(支那人、朝鮮人及び日本)、アニミスト——シャーマン教徒である異民族から成つてゐる。

沿海州はロシアの他の縣に比べて喇嘛教徒を含みぬ佛教徒の数は絶對的にも相關的にも第一位を占めてゐる。ロシア帝國に於ける種々の宗派の佛教徒は全人口の〇・三%を占めてゐる。

アニミズムとシャーマン教は宗教、哲學的思想の最初の段階にあるもので、多數の原始民族と共に我が異民族もその段階に立つてゐるのである。アニミストはその周囲の自然はその靈魂の屬性、即ち生氣、理性、意志、作用、その他を提供されてゐると考へる。すべてのものは生氣を附與される。自然に生氣を與へてアニミストはそれを人間化し、自分と共通する多數の特徴を發見する。對象の彼の眼に見える形態は單なる外觀であり、その背後に靈魂。即ちオロチの所謂「セヴァヒ」が隠されてゐる。ギリヤークの言葉によれば、熊はたゞいつもの風貌をして人間の前に現れるが、自分の家にある時は熊はほんとの人間であり、人間のやうに着物を着てさへゐる。オロチは石に向つて言ふのである、「嗚呼、そんなに長生きしてゐるお前は、俺に病氣の原因を説明してくれ！」と。チュクトのシャーマン僧は言ふのである、「すべての實在は生きてゐる……ランプは歩く、家の壁は聲をたてる……袋の中の毛皮は夜話をする……小さな灰色のアリスヒ鳥は枝と幹の間に坐つてシャーマン教の呪術を行ふ……樹木は斧で打たれると、シャーマン僧の太鼓を拍子木でたゞいたやうに泣く」と。

靈魂の世界を作り上げて、異民族——アニミストはそれらのものとの共通性を探し出し、死後は彼自らもこれらの世界との交際を許されると考へてゐる。これらの靈魂の中の或るものは善行をなす庇護者であり、他のものは悪者であるが、若し人がそれに打克つことが出来るならば人間の意志に従ふものである。この能力は自然によつて何人にも與へられてゐる譯ではない。特に敏感な神経系統をもち、精神病、失神、幻覺に罹り易い人々、相續によつて両親から神經質の體質と共に催眠力を用ひる材能と風俗には奇蹟又は奇術と見える一聯の現象の智識を授けられてゐる降神者型の人々が特別の力をもつてゐる。これが即ち僧侶と呪法家の役割を演じるシャーマン僧とシャーマン尼僧である。彼等は人間と靈魂との間の仲介者であり、彼等は靈魂に働きかける秘密の智識と靈魂を秘める材能とをもつてゐるとするのである。

社會道徳(註)

註 この問題の分析は完全だとは言へないが、しかし著者は黙つて邊疆の生活に於けるかくも忌ましい紅鬍子(馬賊)や酒桶の密輸入や酒精飲料、過度の消費の問題を素通りすることは出来ないと思へる。

邊疆の生活に於ける最大の害悪は紅鬍子の掠奪と殺戮と賄賂、廣汎な酒精の密輸入、及び過度の酒精飲料の消費である。非常に長い陸上の國境は酒精の輸入及び支那の盜賊である紅鬍子の侵入を防ぐための監督を非常に困難ならしめる。

沿海州移民管理局統計部の行つた調査は、密輸入は戰爭中増大を続け、密輸入されたウツカは以前それがなかつた村にまで出現したことを示してゐる。密輸入者の中ではコザックが第一位を占め、支那人、農民、及び朝鮮人がそれに次いでゐる。移民の家族では女や小兒さへウツカを飲むことが稀でない。多くの村では飲酒から生じた多數の道徳的及び肉體的墮落の例が見られる。

盜財團紅鬍子の活動は邊疆の多數の場所に擴つてゐる。ウスリー地方では掠奪と個人の殺戮は非常に多く、そのほか殆ど毎日村の射撃と襲撃を行つてゐる。盜賊團は明らかに非常によく組織されて居り、手引きをもつて居り、それによつて不意に襲撃して、追撃する警官から容易に逃げ去るのである。野原の離れた小屋に住んでゐる支那人や朝鮮人が無防備であるのを利用して、紅鬍子は組織的に彼等に賄賂を與へ、そのことについての保證さへ與へるのである。

醫 療

一つの病院に割當てられる國土の面積の廣さに注意するならば、醫療状態が非常に好ましくないことが分る。即ち、アムール州では一つの病院に對して四、八九三平方露里であり、沿海州では六、四四九平方露里、カムチャッカでは五七一、七〇五平方露里である。この最後の場合は一つの病院がオーストリー・ハンガリー全體を受持つに等しいのである。一つの病院の受持つ人間の數に注意するならば、同様に餘り好ましくないから關係が分るが、しかしアムール州と沿海州については少くとも他の縣に比べるならばさほど悪いことはない。即ち、アムール州は人口一萬人を三人の醫者が受持ち、沿海州では二・三人、カムチャッカ及び樺太では一人、ヨーロッパ・ロシアでは一・五人である。なほまた都市の住民ははるかに好ましい條件の下に置かれてゐることに注意せねばならない、といふのは醫者は主として都市に住んでゐるからである。

邊疆には人間の健康に特別不利な條件をもつてゐる場所はない。しかし、邊疆はアジアの東部の諸國の近くに位して居りこれらの國は多數の危険な傳染病の格好の巢窟であるため、それが我國に運び込まれる危険があることに注意せねばならない。これらの病氣の中には、コレラ、ペスト、滿洲チフス等がある。この地方の病氣の中でアムール下流の癩病と所謂『癩醉穀物』の食用によつて起る病氣を擧げることが出来る。

南ウスリー地方に於ける所謂『癩醉穀物』の出現は毎年起つてゐる Fusarium 屬の一種の菌に冒された穀物又は穀粒を食べると、人間及び多數の家畜には中毒の徴候が現はれ、それは先づ頭痛、眩暈を生じ、身體全體が弱り、その後で屢々嘔吐を伴ふ。この病氣は南ウスリー地方に特に多い。それは地球上の他の場所にもあるが、こゝではそれが最も著しく擴つてゐる。菌そのものが明らかに風土的な、即ち特定の地方に特徴的な植物であり、何處か他所から齎されたものではない。礦泉及び温泉の調査はまだやつと目論見られかけたところであり、従つてその價值については文献に資料が乏しい。



アムール下流河區の河岸の村



定住した最初の數年の新住者の移住地

第五部 住民地

住民地の性質

邊疆に於ては都市のほかには次のやうな型の住民地を擧げることが出来る。即ち、村又は邑（コザックの處ではスタニツァといふ）所有地、鑛山及び大きな鐵道の驛の近くの聚落、區、漁區、狩獵又は農業を営む朝鮮人及び支那人の一軒立の小屋、異民の假小屋がそれである。

邊疆の村が建物の詰つたヨーロッパ・ロシアの村落と非常に異つてゐるのは、廣い大きな街路のあること、建物が極めて疎らにあることである。これらの村では都會型の鐵で屋根を葺いた家があるに多い。古老の村と新住者の村は非常に相違があるが、特に新住者の定住した最初の數年間がさうである。建物の周圍の半ば取除かれた林、やつと通行出来る街路の木、出來上つてゐない建物と屋根のない小屋、新住者の村の一時的な生活のための天幕及び土小屋は、新しい場所の生活の最初の段階にあることを立證してゐる。村の人口は非常に少い。ヨーロッパ・ロシアには數萬人の住民のゐる村が稀でないが、こゝでは千人及びそれ以上の住民のゐる村は極めて稀にしか見られない。その住民が種々の縣から移住して來た村はあれやこれやの家の主人が何處から來たかといふことをその建物の建方の特徴によつて容易に言ひ當てる事が出来る。といふのは新たな郷土に來ても農民は彼等の嗜好、仕來り、及び慣習に忠實であるからである。

邊疆では、『地主邸』、『莊園』、『領地』、『田莊』といふ用語を用ひないで、『所有地』といふ言葉を用ひてゐる、少數の土地所有者が所有地をもつて居り、また農民も耕地から收穫を運ぶのを容易にするため所有地を設けてゐる、といふのは屢々遠くから村にそれを運ぶことがあり、道路の状態によつてはそれが困難であるからである。

停車場の近くの驛の聚落の土地は移民管理局が一定の地代をとつて分配してゐるが、それは都市と村落との中間物とも言ふべきものである。こゝには一聯のレストラント、大きな商店、農業用機械器具の倉庫があり、時には可成り大きな學校がある。都市と異るところはその行政組織であり、そこには都市の自治がない。

異民族の假小屋は異民族の生活に起りつゝある急變と關聯して過渡期的特徴をもつてゐる。少し前には異民族——狩人の大多數は次のやうな建物を建てた。即ち、河の近くに夏の住居『夏營所』即ち漁季の間の住居を建て、この最初の建物から數露里又は數十露里のところに高い棧の上に倉庫を建て、漁獲物を保存し、また『冬營所』を建てた。最後に狩獵地に出掛けた異民族は野營天幕を建て、黒貂狩りの間そこで生活した。近時黒貂及びその他の野獸が減少し、魚類に對する需要が増大したので、アムールの異民族は次第に定住的生活法に移り、アムール河及びその支流の河岸の人數の少い假小屋に定住してゐる。比較的最近彼等は粘土の床の下に煙出しのある『炕』、紙を張つた窓のついた小屋を朝鮮人及び支那人から學んだギリヤーク及びゴリドの假小屋の特徴をなすものは干臺（寫眞を見よ）、高い棧の上の倉庫、及び犬を繋ぐ棒（寫眞を見よ）である。なほギリヤークの假小屋には熊の檻があり、特別の祭日用の熊を入れて置き、祭日の時に歌を唱ひ踊りながらそれを引出し、そのあとで特別の儀式を行ひながら殺すのである。

主要都市と邊疆の住民地

アムール州

州の首都ブラゴヴシチン、スクは、一八五八年ゼーヤ河のアムールに注ぐ所に建設され、商取引額に於てはアムール沿岸の都市中第一位を占めてゐる。汽車から船へまたその反對の商品積換へのための波止場であり、汽船の冬季碇泊所である。税

關がある。ブラゴヴニシチュンスクとアムール河の對岸にある支那の都市黒河との間には、ブラゴヴニシチュンスクで消費し或ひは國內の奥に入る多量の商品の移動がある。一九一五年一月一日の人口六二、五〇〇人。

教育及び研究機關の中では、都市の博物館の圖書館を管理してゐるシベリヤ研究協會アムール支所、アムール農業協會、醫師協會及び測候所が擧げられる。

ゼーヤ、ブリスタ、ニ市はゼーヤ河に船舶の航行出来る河岸にあり、商取引額は可成り多い、といふのはそれは豊富な産金地方の中心地をなしてゐるからである。同様に行政上の中心地であり、鑛山警察署長及びチルニエヴォ・ゼーイスキイ移民地区の主任がゐる。人口約五、〇〇〇人。

アレクセーエフスク市は一九〇九年アムール鐵道のゼーヤ河横斷地點の近くに設立された。人口約八、〇〇〇人。都市行政は移民機關の掌中に握られてゐる。既に競賣によつて貸與された土地が都市建設の場所に當てられた。アムール鐵道の管理局がこゝに集中したこと、關聯して、都市の發達を見越して土地の貸與は成功裡に行はれた。こゝには移民局の大きな病院がある。

商業的觀點から見ても重要なアムール州の村の中では、ブラゴヴニシチュンスクから三〇露里の所にあるイヴァノフスコエ村、ゼーヤ、プレーヤ平原の中央部にあるベスチノ・オゼルスコエ村、タンホフカ村、ミハイロフスコエ村、トマ河畔のアレクサンドロフスコエ村を擧げねばならないが、最後の村はボチカレヴ分岐驛の近くにあり、この驛からブラゴヴニシチュンスクに支線が通じてゐる。アムール河畔のコザックの村では次の如きものを擧げねばならない。即ち、ボクロフカ村はシルカ及びアルグニ河の合流點の近くにあり、イグナシノ、チャリ、ンダ波止場のうち後者は商取引額が非常に多い、といふのはそれはチャリ、ンダ産金地區に行く商品の中繼點に當るからである。更に驛邊街道によつてゼーヤ市に連絡してゐる



キエフ縣から来た小ロシア人の百姓小屋



大ロシア人の百姓小屋

チルニエヴォ驛、自然性石炭で有名なツカヤン村、一六五八年に露支間の戦ひの行はれたクマラを擧げねばならない。コザック村及び波止場には、ボヤルコヴ、インノケンチエフスカヤ、ラウデ、エカテリノニコリスカヤ及びミハイロ、セメノフスカヤがある。

沿海州

要塞であり、軍港、商港であり、税關のある州の首都ウラヂヴ、ストツクがある。

金角灣の軍事的哨所の設

置は一八一六〇年に遡るが、當時即ちこの地方のロシアへの公式的併合の数ヶ月前に海岸に一隊の軍隊が上陸し、兵營と食糧倉庫が建設された。最初の居住者はニコラエフスクから来た移住者であつた。六〇年代の終りには哨所には既に八〇戸の家屋があり、金角灣を訪れる商船の数は著しく増大してゐるが、當時ウラヂヴオストツクは電信によつてハバロフスクに連絡し、兩者の間に驛遞交通が開設された。

一八七二年にはニコラエフスクは海港としての首位をウラヂヴオストツクに譲つてゐた筈であるが、こゝに主要港を移し、一八七六年にウラヂヴオストツク哨所は市と改稱され、都市になつた。一八八九年にウラヂヴオストツク市は要塞と改稱された。八〇年代にアムール地方研究協會が設立され、この協會の博物館は博物學的及び人種誌學的蒐集の貴重な保藏所を開設してゐる。博物館には邊疆に關する書物を集めた貴重な圖書館と地方の研究者及び外來の研究者が行ふ生物學研究所の實驗室がある。一八九一年五月當時皇太子であつた皇帝のウラヂヴオストツク訪問の際ウスリー鐵道が開通した。一八九九年に邊疆に於ける唯一の高等教育機關——東洋專門學校が開校され、一九一二年にはウラヂヴオストツク氣象觀測所が開設された。この都市には上記の學術協會及び教育機關のほかになほ、バステロフスカヤ研究所を設立した醫師協會、技術協會、水路探檢隊——その船舶はこゝに冬季碇泊所をもつてゐる——及び農業協會がある。

金角灣は二つの部分に分たれる。即ち、一つは商港の管轄に屬し、他は軍港の管轄に屬すが、後者は大きなドックとよく設備された工場を有し、そこで軍艦の修理が行はれる。

商取引額及び産業企業の取引高ではウラヂヴオストツクは邊疆で第一位を占めてゐる。

人口は(一九一六年一月一日)九七、五〇九人である。その性別分布は次の如くである。

男子……………六九%

女子……………三一%

人種の分布

- ヨーロッパ人種……………五二%
- 黄色人種……………四八%
- 内支那人……………四〇%
- 日本人……………三・八%
- 朝鮮人……………四・二%
- ロシア臣民と外國人との分布
- ロシア臣民……………五二%
- 外國人……………四八%

ヨーロッパ人種、支那人、朝鮮人及び日本人の性別分布

ヨーロッパ人種	男子	四四%	女子	五六%
支那人	”	九八%	”	二%
朝鮮人	”	六一%	”	三九%
日本人	”	六一%	”	三九%

毎年の住民の數を比較する時、可成り急速な人口増加のあつたことに注目せねばならない。一八九七年——二一、〇〇〇人、一九〇七年——六一、〇〇〇人、そして一九一六年——九七、五〇〇人である。かやうに二〇年間(三ヶ月を欠く)に人口は殆んど五倍に増加したのである。

ニコリスク・ウスリースキイは一八九八年にニコリスコエ村から市に改稱された。それは緩芬河の流れてゐる平原にある。農業地域の重要な商業中心地である。特に鐵道の開通以來その意義は増大した。一九一六年に帝室ロシア地理學協會の支部が

開設された。都市には滿洲ツングース種族の支配した時代の古い要塞の遺跡が残つてゐる。人口三〇、〇〇〇人(一九一五年)ウラチヴ・ストツクを有するニコリスク・ウスリースキイ郡の最も著明な村落の中では次の如きものを挙げねばならない。即ち、ボシエト灣の海岸にあるスラヴァ、ンカ、バラバシ、ノヴォキエフスコエ區及び國境の近くのボシエト、哨所、鐵道の驛の近くの多額の商取引高を有するラズドリノエ村、興凱湖畔の古い村である。カ、メ、ニ、ル、イ、ボ、ロ、フ、この村からほど遠からぬ所にあるホルル及びジャリコヴの大きな村、ムチナヤ驛を有する大きな商業村チ、ニ、ゴ、フ、カ、ダウビへの上流の盆地にあるアヌチノ區がそれである。オリギンスキイ郡にはその人口が一、〇〇〇人を越える村落は非常に少く、かやうな村落はスーチャン河畔及びチニヘ灣の近くの鑛業聚落であるが、その他のより著明な村落は海岸にあり、即ち、マイヘ及びツイムヘ河の河口のシコトヴ、郡の警察署のあるスーチャン河口の近くのウラチミロ・アレクサンドロフスコエ、小いが便利な汽船の碇泊所のある聖オリガ、哨所、良好なインベラートルスカヤ灣岸にあり木材を輸出するインベラートルスカヤ灣哨所がそれである。

イマンスキイ郡の行政上の中心はイマン、聚落にあるが、それは屢々洪水の時浸水するイマン河盆地のゴザツクの土地のある地方にあり、ウラチヴ・ストツクとハバロフスクの中間に位し。人口五、〇〇〇に達す。この郡の村の中では次の如きものが著明である。即ち、ゼニコフカ村(スヴィヤギノ驛の近く)及びスバスコエ村がそれであるが、後者は商取引額の點では邊疆で最も著明な村の一つであり、エヴゲニエフカ驛を控え、この驛から舗装しない道路がこの地方の奥、ダウビヘ河及びウラヘ河の盆地の諸村に通じてゐる。スバスコエ村の人口四、〇〇〇以上。スバスコエには多數の大商業經營があり、また大きなセメント工場を含む若干の工場がある。イマンスキイ郡には大農業經營を営み、養蜂と蠟燭工場をもつてゐるスヴァト・トロツキイ修道院がある。

ハバロフスク郡の行政中心地及び總督所在地はハバロフスクである。一八五八年にウシリ河の河口の近くにハバロフスク村が設立され、後にハバロフスク市と改稱された。惠まれた位置にあるため都市は著しく膨張し、東シベリヤ總督區からアムール沿岸總督區が分離された一八八九年以來、ハバロフスクは邊疆の主要行政中心地となり、現在に至るまでさうである。學術協會及び學術施設の中では、總督グロデコウによつて設立された博物館を挙げねばならないが、それは帝室地理學協會のアムール沿岸支部に所屬し、異民族及びアジア東部の民族の人種誌、邊疆の動物誌、植物誌及び考古學の非常に貴重な蒐集を備へてゐる。この協會の外にハバロフスクにはなほ帝室東洋學協會の支部がある。人口五一、三〇〇人。

ウスリー・ゴザツク軍の地區にはイマンのほか聚落ビキンとゴザツク村、グロデコヴ、ドンスカヤ、及びボルタヴが挙げられる。

アムール河の近くの最も重要な村落は、ヴ、ト、ス、コ、エ、ト、ロ、イ、ツ、コ、エ、ニ、ジ、ネ、タンボフスコエである。

サガレン州

一九一四年二月にサガレン州に沿海州のウドスキイ郡が編入されたが、この郡の行政上の中心地はニコラエフスク市である。この都市は海から三〇露里邊りのアムール河口にあり、漁業の中心地である。吃水の浅い海洋汽船はこの都市に至ることが出来る。人口は一



アムール河畔のゴリドの假小屋



イマンスキイ郡の村

四、四〇〇であるが、この数は漁季の間は著しく増加する。他の村落の中にはボリシニ・ミハイロフスコエ、マリンスコ・ウスベン、スコエ、デ・カストリ灣のアレクサンドロフスキイ哨所が挙げられる。

セレムチヤ河の流域から發し、山脈を越えアムグン河の谷間に沿ふてニコラエフスクに至る目下建設中の鈍装しない土道に沿つて産金地方の商業中心地として重要な二つの聚落、即ちケルビンスカヤ、レジデンツィヤとヴニセラヤ・ゴルカがある。

樺太にはアレクサンドロフスキイ哨所があるが、住民は主として流刑者とその子孫である。

カムチャッカ州

行政及び商業の中心地としては、州の首都ベトロヴォフスクを挙げねばならないが、州全体の人口が少く、一九二二年のこの町のそれは六一九人であつた。なほ以前港であつたオコーツク、及びアヤン、ヤムスク、ギジガの村落、カムチャッカ西海岸ではボリシレツク、半島の中部ではヴニルフネ・カムチャツコエ、カムチャッカ河の河口では大罐詰工場のあるカムチツコエが挙げられる。アナズイリ地方にはマルコヴ及び哨所ノヴ・マリンスクがある。

第六部 邊疆及び東方海洋の調査

邊疆に關する報道を初めてヨーロッパにもたらしたのは、十七世紀の中頃コザック部隊の指揮官ボヤルコフ、デジネフ、その他であつた。カムチャッカについては、アドラソフから知識を得た。

十八世紀の初め頃にはデジネフによるアジアとアメリカの間の海峡の發見の報道は失はれてゐたか忘れられてゐたため、ペートル大帝は「アジアはアメリカと結合してゐるか」の問題に興味をもち、ヴトッス、ベリリ、ングを隊長とする探検隊を組織しベリリ、ングは一七二八年に再び海峡を發見し、彼の名前を附けた。一七七三年にアンナ、ヨアノヴナの勅命によつて同じくベリリ、ングを隊長とする「大北、部探検隊」が組織され、この探検隊はカムチャッカ及びオコーツク地方のみでなくアラスカ及び北海からベリリ、ング海峡に至る北氷洋の全海岸を研究し記録する任務を課せられた。この探検隊には多數の有名な動物學者、天文學者、地理學者、歴史家、地形學者、及び人種誌學者が参加したが、最も著名な人々の中で次のやうな人々を挙げねばならない。即ち、有名な著作「シベリア歴史」の著者ミルレル、動物學者グメリン、天文學者で學士院會員であつたデリリ、デラタロエ、有名動物學者ステレル、有名な著作「カムチャッカ」地誌の著者、學生クラシニ、ニコフがそれである。それに加つて活動した者の總數は六〇〇人に達し、探検隊には非常に重要な意義が附與され、そのため、この地方の住民——異民族にとつては極めて困難な非常の方策をとり、東シベリヤの山脈や森林帯を越えて裝具の輸送を早くした。錨、錨鎖、帆具、道具、船の鐵の部分、その他はヨーロッパ・ロシアから運搬した。探検隊は一七四二年まで活動した探検隊の二隻の小さな船、所謂郵便船はベリリ、ング及びチリコフを隊長としてアラスカ海岸に航行し、その時まで文明國に知られてゐなかつた國を發見した。歸路ベリリ、ングの船は逆風に逢ひ極めて困難な状態に陥り、饑餓に悩み、乗組員は半死

の状態となり、探險隊の隊長の名を附した島に寄つた。病氣になつたベリリングは島に上陸し、こゝで死亡した。チリコフは多大の損害を蒙り、同じく病氣になつてベトロバヴロフスクに着いた。探險隊の船は千島列島に沿ふて航行し、それをロシヤに併合し、更に日本列島にまで近づき、その住民と接觸し、ウドスカ入江、シャンタルスキー群島、オコトツク海岸、カムチャッカ、アナズイリ地方、北氷洋の海岸を調査した。

十八世紀の中頃ロシヤの商人及び一部は特に派遣された人々が、アレウトスキー諸島及びアラスカを訪れ、アジア東北の海岸の記録を作つた。

七〇年代にベリリング海に外國の航海業者が出現したが、彼等の中ではイギリスの旅行家クックが有名である。彼の探險隊の任務は北アメリカを迂回する航路の發見であつたが、彼はそれに成功しなかつた。クックによつてベリリング海の海岸の記録が作られた。冬探險隊はサンドウィチ諸島に行き、そこでクックは殺された。その後継者ラークは仕事を續けたがやがて死亡しベトロバヴロフスクに埋葬された。この探險隊は大洋の北部を初めて地圖に載せることを可能にした。

一七八五年に日本海にフランスのラベルズの探險隊が現れた。この探險隊は開宮海峡の海岸を調査し、その滞在の足跡としてフランスの航海業者の命名した多數の名稱が残つてゐる（デ、カストリ、クリリオン岬、ラベルズ海峡、ド、エ、その他）ラベルズは誤つて韃靼海峡と呼んだが、その海峡を通つて北に行く航路は、彼の意見によればアムール河口の入江が淺いため不可能であると考へられた。海峡の名稱の誤りは、旅行家がウスリー地方を韃靼と考へてゐたことによるのであつてそれは勿論現實と一致しなかつたのである。

一七九三年にイギリス人ブラウトンは日本海の海岸及び韃靼海峡の南部の數ヶ所について記述した。

一八〇三年八月にクルゼンシュテルンがクロンシュタットからその最初の世界一周旅行を開始した。これは一般にロシヤ人の最初の世界一周旅行であつた。探險隊はアラスカのロシヤ領に食糧を輸送し、大洋の水路學的調査を行ひ、日本に使節

を遣る使命をもつてゐた。クルゼンシュテルンの探險隊並にそれに續く一聯の探險隊は多數の發見を行つて科學的に貢献し、當地の海岸を洗つてゐる東方の海洋の水路學のために豊富な材料を提供した。

クルゼンシュテルンもまたアムール河口の入江に近づいたが、それが淺いを見て樺太は大陸に結合してゐると考へ、南に去つた。

一八〇八年に日本人の學者間宮林藏がアムール河口及び樺太島を調査した。この學者の編輯した地圖は有名な日本の研究家、シーボルト博士によつて發行された。

十九世紀に數十人のロシヤの海軍士官及び學者が邊疆の東北部の海岸及び樺太島の海岸の記録に従事した。最も有名な探險隊の隊長の名前は、ゴロヴニン（二回旅行を行つた）コツエブ、（同じく二回旅行した）リトケ、ザヴ、ホイコ、ウランゲリ、ネヴ、リスコイ、ノルデンシュリド、及びマカロフ提督である。

四〇年代に有名な旅行家であり自然科學者であるミツデンドルフがウドスキイ地方を訪れた。彼はアムール河の下流にある地方が支那に所屬してゐないことをロシヤに知らしめた。

ニコラエフスクが設立された一八五〇年以來、カムチャッカ、アラスカ、アナズイリ地方の遠隔の地方及びそれを洗つてゐる海の研究に對する興味はより近いアムール沿岸地方の研究の興味にとつて代られた。下流アムール沿岸地方研究の基礎を置いたのは、ゲ、エ、ス、ネヴ、リスコイの「アムール遠征隊」（一八五、一八五、五年）であつた。ネヴ、リスコイとその共働者によつて次のやうな地方が記録された。即ち、支流ゴリユン河の流下點に到るまでのアムール河及びゴリユン河、アムグン河、キジ湖、ブレイヤ山脈、ウダ河流域、及び著しい距離に互る間宮海峡の海岸がそれである。

ムラヴィヨフの流下の時、即ち一八五五年ムシロカ河からニコラエフスクに至るアムール河全體の地圖が作製され、一八五六年にニコラエフスクに派遣された第二回目の軍隊の輸送と共に博物學者マリアクを隊長とする帝室地理學協會探險隊が

調査を行ひ、學士院で發行されたアムール地方の地圖の編纂のため多大の材料を提供した。

一八五九年ウスリー地方の併合の前にブッチャン提督は朝鮮の東海岸を記録し、ボシエト灣及び聖オリガ、聖ウラヂミルの兩灣を發見した。

五〇—六〇年代にシベリヤ小艦隊の士官によつて、併合された地方の海岸の非常に多數の記録が作製されたが、それはアムール河口の入江、開宮海峡、ペートル大帝灣、及び日本海の北部の地圖を作ることを可能にした。その後數十年間海軍士官は水路學的研究を續けたが、それは今日に至るまで續いてゐるのである。近時前記の特に科學的研究に適する船「オコーク」號に乗つて、チダンコを隊長とする海軍省の水路探險隊が活動を行つた。上記の探險隊及び水路學的研究は、一部分邊疆、主としてそれを洗つてゐる海洋の水路學的研究の作製の目的をもつてゐた。即ち、海峡、灣、及び海の深さを調査し、海岸を記録し碇泊所の條件を明らかにし、海洋の氣象的特質、水の性質を研究し、多數の地點の磁的觀察と天文學的確定を行つた。

邊疆の地質、活動誌及び植物誌、附帶的には地理的研究に參與したものに次のやうな學者と探險隊がある。

ペーリングの第二回目の探險隊に参加したステレルの手記の大部分はその蒐集と同様に殘念ながら彼が早生したため失はれてしまつた、それは學者バルラス、ゴロシヤ及びアジアの動物地理學に關するその有名な著作に、魚類の新たな種を記録することを可能ならしめた(一八一一年)

ステレルと並んでクルゼンシュテルンの探險隊に参加したレジュウスの名前を挙げねばならない。彼は當地の海に棲む非常に多數の動物の種類を記録し、バルラスの死後、一般にロシアの動物誌、特に東方の海洋の動物誌の研究に基礎を與へた彼の勞作を完成した。

コツエブの探險隊は海洋の動物誌の研究のために非常に多くのものを與へたが、この探險隊には二人の優れた動物學者

シヤミツトとエシヨリツが参加した。前者はその觀察によつて科學に豊富な資料をもたらし、後者はヨーロッパの博物館に初めて現はれた動物を多數蒐集した。リトケの探險隊(一八三四年)も動物學に貢獻するところがあつた。

動物誌の研究にはなほ多數の人々が参加したが、その中では次のやうな學者の名前が最も有名である。即ち、有名なシベリヤの研究者ミッデンドルフ、動物學者であり同時に人種學者としてより有名なシュレンク、興凱湖に飛來する時の鳥の生活を記述したブルジニウ、ワリス、カイ、カムチャッカ及びアムール沿岸地方の動物誌を研究したズイボフ、スキ、樺太島及びその動物誌について記述したニコリス、カイ、東方の海洋を研究した帝室ロシア地理協會朝鮮、樺太探險隊(一九〇〇—一九〇一年)の隊長シュミツト、及び近時鮭類の生活、主として鮭の生態學を研究したソルダトフがそれである。

植物學者マクシモヴィチが初めて滿洲植物誌の研究に着手した。一八五四—一八五六年及び一八五九—一八六〇年に彼はアムール河、松花江、ウスリー河に沿ふて旅行し、シホタ・アリンを二回横切り、海岸を調査し、一八六〇年にはその調査の手を日本にまで延ばし、そこでもまた植物研究のために非常に多くのことを行つた。彼はその勞作によつて邊疆の植物誌研究の基礎を置いた。

植物學者マクシモヴィチ、シュレンク、及びブレイヤ山脈の植物誌を研究したラツデ、並に帝室ロシア地理學協會の「シベリヤ」探險隊(一八五五—一八六三年)に参加したグレソ、及びシュミツトも研究上多くのことをなした。

マクシモヴィチの勞作の後、前世紀には邊疆の植物誌の研究上の勞作は殆んど現れなかつた。前世紀の終りに植物學者マロフがその研究を開始し、その多年の調査の結果、ウスリー地方及び滿洲の植物誌の基礎的勞作「滿洲の植物誌」が現はれた。近年彼の調査はカムチャッカにも及び、そこで彼はモスクワの商人リャブシンスキイの資金により帝室ロシア地理學協會によつて組織された探險隊の一員として活動した。

また移民管理局によつて組織された多數の探險隊及び御馬司エヌ・エル・ゴンドラツチを隊長とし勅命によつて派遣され

た、アムール探検隊（一九一〇—一九一一年）を挙げねばならない。この探検隊に参加した者の中では、プロホロフ教授が挙げられるが、彼の指導の下に氣象的、植物學的、及び土壤的觀點からのアムール州の研究が行はれたし、現在も行はれてゐる。

その博物館の貴重な博物學的蒐集を行つた地方の地理學協會の活動も、邊疆の動物誌及び植物誌を知る上に貢獻してゐる。邊疆の地質學の研究に關しては、既に前に述べたシュミット及びグレンを隊長とする探検隊（一八五九—一八六〇年）を挙げねばならないが、それは樺太及びアムグニ・ブレイヤ地方の地質及び植物地理を知る上に重要な貢獻をなした。樺太では白堊紀の地層及び中新紀の植物誌が研究された。

一聯の學者が邊疆の産金地方を調査したがその中では、アネルトの名前が挙げられる。デ・イヴァノフはシホタ・アリンを調査した。

土壤の研究に關しては、グリ、ン、キ、教授に指導された移民管理局の一隊によつて調査が行はれた。東北端及びカムチャッカの地質は、ボグダノヴィチが研究した。ムラヴィヨフ、アムールスキイ半島は地質學者、ヴァツテンブルグによつて調査され、スーチャン鐵道方面は、ミヤリ、キ、ン、ム、シ、ケ、ト、フ、及びアネルトによつて調査された。

一九〇六年乃至一九一〇年の間樺太島では地質委員會の探検隊が地質學的觀點から島の研究を行ひ、礦物富源の埋藏及び分布の状態を明らかにした。

地形の起伏、邊疆の種々の地方の植民の適不適に關しては、移民管理局の一隊、一九一〇—一二年のアムール探検隊の参加者及び陸軍大佐アルセニエフによつて多くのことがなされたが、アルセニエフは一六年間のシホタ・アリンの密林旅行中にウスリー地方をよく研究し、シホタ・アリンの二二箇所を横斷した。

邊疆の氣候の研究に當つてゐるのは、ウラヂヴストツク氣象觀測所とブラゴウシチンスカの測候所である。

古考學的材料的蒐集とこの地方の歴史、前時代の研究を行つたのは、クラボトキン、ブツセ、及びマルガリトフであつた。現在アルセニエフとフドロフが發掘を行つてゐる。

アムール沿岸の異民族を研究した古典的研究には、シムレンケのそれがある。ボゴラズとヨヒリソンはアジヤ東北の舊アジヤ人を研究した。前者の探検隊はニューヨーク國立博物館の資金によつて組織され、後者はリブシンスキイの探検隊に參加したのである。

樺太のアイヌは人種學者ピルスドスキーが研究し、ギリヤークはシュテインベルグが研究した。

地理學協會は貴重な人種學的蒐集をその博物館に集めてゐるが、それは未だ研究されてもゐないし記録されてもゐない。植民の目的のための利用の觀點からする自然富源の調査及び農村の住民の物質的狀態の研究は主として最近着手された。

一九〇八年にアムール沿岸に於てボルネルの指導の下に『極東地方總廳』の探検隊が活動したが、この探検隊の任務は、遠い邊疆のロシアの農民の當面してゐる生活上及び經濟上の條件の究明にあつた。一九〇九年には『アムール探検隊』組織の決議の勅裁を得たが、この探検隊の任務は邊疆、特にアムール鐵道の地方の全面的研究にあつた。探検隊の隊長には御馬司エス・エル・ゴンダツチイが任命された。探検隊の隊員は種々の調査及び觀察をなすための資金と、多數の設備に集められた材料を自由に處理することが出来た。そのほか多數の問題について地方の社會的活動家及び種々の役所の代表者が參加した會議を開いた。探検隊の活動の結果、アムール沿岸地方の生活の種々の方面に關する非常に重大な、多數の調査が行はれた。

沿海移民管理局は一九一〇—一九一一年にこの州の古老及び新住者の統計的調査を行つた。

移民管理局本部により一九一〇年まではフレロフの指導の下に、そして現在はフェドチンコの指導の下に行はれてゐる永續的な土壤、植物學的調査も、邊疆の植民的收容力の問題と緊密な關聯がある。



アムグン鑛山地方の荷物の輸送

移民の状態の調査に關しては、なほ一八六八年のブルジニヴリスキイの調査及び前世紀の八〇年代のブツセの調査を挙げねばならない。カムチヤッカの調査に關しては前述の探検隊及び學者のほかに、次のやうな研究家が調査した。即ち、一八五一—一八五五年にはディトマルが旅行した。半島の地理學的記録は永らくこゝに住んでゐたチニシニ博士によつて作られた。一八九六年には「オコトツク、カムチヤッカ探検隊」が組織され、それには地質學者ボルガノヴィチ、地形學者レリヤキン、及びスリニニ博士が参加したが、最後のスリニニの任務は經濟的觀點からこの地方の研究と博物學的蒐集物を集めることであつた。

一九〇八年には商人リヤブシンスキイの資金によつて組織された探検隊がカムチヤッカで活動した。その組織の規模、費用、参加人員ではこの探検隊は最も大きなものの一つであり、その参加者の中では、植物學者マロフ、動物學者シニミツト及び人種學者ヨヘリンが挙げられる。探検隊の成果は最近出版され始めた。

(終)

譯文
ソ聯極東及外蒙調査資料既近刊目錄

第一編	ソ聯極東地方要覽	菊判	二六二頁
第二編	ソ聯極東の運輸交通問題	同	一三八頁
第三編	モスコウ—イルクツク航空路の氣象	同	一八一頁
第四編	南ザバイカルの地形と土壤(上卷)	同	三四一頁
第四編	南ザバイカルの地形と土壤(下卷)	同	二四七頁
第五編	シベリア經濟地理(上卷)	同	二六五頁
第五編	シベリア經濟地理(下卷)	同	二九六頁
第六編	蘇城・オリガ聯合企業	同	三二二頁
第七編	ソ聯極東地方の自然地理及鑛物資源に關する新資料	同	三一頁
第八編	東部シベリアの自然地理及鑛物資源に關する新資料	同	二一八頁
第九編	ソ聯極東及東部シベリアの自然資源と其利用に關する新資料(上卷)	同	二〇七頁
第九編	ソ聯極東及東部シベリアの自然資源と其利用に關する新資料(下卷)	同	二八二頁
第十編	ピロビヂヤン(猶太人自治州)要覽	同	一二〇頁

譯文翻譯ソ聯極東及外蒙調査資料既近刊目錄

露文翻譯ノ聯極東及外蒙調査資料既近刊目錄

第十一編	ブリヤート蒙古自治共和國現勢	二
第十二編	外蒙調査資料 第一輯	菊判 三〇三頁
第十二編	外蒙調査資料 第二輯	同 二〇二頁
第十三編	ソ聯極東地方人種誌	同 一八四頁
第十四編	永久凍土層の研究	同 二五〇頁
第十五編	東部シベリア地方經濟要覽	同 一一一頁
第十六編	外蒙古の食肉資源	同 三五三頁
第十七編	東部シベリア地方の有色金屬鑛床	同 九九頁
第十八編	外蒙古地誌(上卷)	同 一五一頁
第十八編	外蒙古地誌(下卷)	同 二六四頁
第十九編	新疆よりゴビ沙漠を横ぎる	同 一七二頁
第二十編	シベリアの炭田	同 一一四頁
第二十一編	北地航空路の研究(上卷)	同 二五八頁
第二十一編	北地航空路の研究(下卷)	同 二一九頁
第二十二編	ソ聯極東の森林	同 二六四頁
第二十三編	西部蒙古族及び滿洲族(上卷)	同 四二三頁
第二十三編	西部蒙古族及び滿洲族(下卷)	同 三四一頁
		同 二六〇頁

第二十四編	アムグン・ブレヤ四河河孟調査資料 第一輯	菊判 一四六頁
第二十四編	ウダ・セレムジ四河河孟調査資料 第二輯	同 二〇六頁
第二十四編	アムグン・ブレヤ四河河孟調査資料 第三輯	同 一四八頁
第二十四編	ウダ・セレムジ四河河孟調査資料 第四輯	同 一四〇頁
第二十四編	アムグン・ブレヤ四河河孟調査資料 第五輯	同 一二八頁
第二十五編	アムール・ヤクーツクの氷上滲出水	同 二五〇頁
第二十五編附録	一九二七—二八年冬季に於けるアムール・ヤクーツク幹線道路の氷上滲出水圖面集	同 四六倍判 三六頁
第二十六編	全蘇聯鐵道輸送統計	菊判 一六七頁
第二十七編	ソ聯極東の水産及畜産	同 二六七頁
第二十八編	カザクスタン諸州概観	同 一一九頁
第二十九編	南ヤクーツク部氣候・地形・土壤・植物誌	同 二四六頁
第三十編	全ソ聯鐵道貨物移動統計	同 二二二頁
第三十一編	東部シベリア地方自然地理概観	同 二七〇頁
第三十二編	ソ聯極東地域に於ける新建築材料	同 一一六頁
第三十三編	ソ聯極東の産金地(上卷)	同 二八七頁

露文翻譯ノ聯極東及外蒙調査資料既近刊目錄

露文翻譯ソ聯極東及外蒙調査資料既近刊目錄

第三十三編	ソ聯極東の産金地(下卷)	四	三二二頁
第三十四編	ソ領亞細亞動力資源調査書 第一輯	同	三三六頁
第三十四編	ソ領亞細亞動力資源調査書 第二輯	同	二八八頁
第三十四編	ソ領亞細亞動力資源調査書 第三輯	同	一三五頁
第三十四編	ソ領亞細亞動力資源調査書 第四輯	同	二〇〇頁
第三十四編	ソ領亞細亞動力資源調査書 第五輯	同	三三四頁
第三十五編	東部シベリアの人口問題	同	一〇頁
第三十六編	カムチャツカ州要覽	同	二四一頁
第三十七編	蘇領北地事情	同	二四三頁
第三十八編	ヤクト自治共和国現勢	同	二五二頁
第三十九編	ヤクトに於ける氣象觀測資料	同	四六倍判一三二頁
第四十編	西部シベリア地方要覽	菊判	三二六頁
第四十一編	西部蒙古及烏梁海地方の自然地理概観(上卷)	同	三五八頁
第四十一編	西部蒙古及烏梁海地方の自然地理概観(下卷)	同	四一三頁
第四十二編	新疆經濟要覽	同	九二頁
第四十三編	アムトル州誌	同	七四四頁
第四十四編	沿海・アムール地方誌	同	二三〇頁
第四十五編	東部シベリア地方の氣候	同	未刊

昭和十三年七月二十日印刷
昭和十三年七月廿五日發行

露文翻譯ソ聯極東及外蒙調査資料 第四十四編
沿海・アムール地方誌

著作兼 發行人	大連市桃源臺八六番地 山 岸 守 永
印刷人	大連市近江町九一番地 山 田 浩 通
印刷所	大連市近江町九一番地 東亞印刷株式會社
發行所	大連市東公園町三〇番地 南滿洲鐵道株式會社

14.5
563

145
563

終